

前近代東南アジア史における 「中心－周辺」関係の類型化

1. 研究組織

研究代表者：八尾 隆生（大阪外国語大学外国語学部・助教授）

研究分担者：深見 純生（桃山学院大学文学部・助教授）

桃木 至朗（大阪大学文学部・助教授）

真栄平房昭（神戸女学院大学文学部・助教授）

2. 研究のねらい・目的

東南アジアをフィールドとした人類学や考古学といった歴史学の隣接科学が、現存の国境という枠組みを相対化した上ですぐれた業績をあげている現在にあって、従来の一国史研究の研究蓄積をふまえつつ、新しい視点で東南アジア史の歴史像を再構成しよう、というのが本研究班の研究方針である。その際、我が班がとった視点が「『中央－地方』関係」であった。

「関係」という言葉はなかなか曖昧で、定義の難しいものであるが、ヒト、モノ、あるいは命令、技術、思想といった多様なものの交流とする。また「中央－地方」という捉え方も、東南アジア全体の中での「中央－地方」を指すのか、いくつかあるサブリージョンの中での関係を指すのか統一すべきであるという考えもある。実際、「類型化」を目指すならその方がはるかに生産的であろう。

しかし、結局のところ、我が班では上記の曖昧な点をペンディングにしたままで研究を進める。共同研究を名乗るにはあまりに研究分担者各員の研究領域、時代、フィールドが異なっているためである。

その結果、もちろん「類型化」を究極の目的として研究を進めるのであるが、そこに到らずとも、研究分担者同士の研究技法の交流の拡大を目指すのが本班のスタンスである。

3. 平成8年度の研究経過

本年度は以下のごとく2回（97年2月末の時点）の研究会を開催し、研究班2人に外部

から2名の方の参加をいただき、計4本の研究報告を行った。

12月14日（土）於大阪大学

大田由紀夫（名古屋大学・日本学術振興会特別研究員）「東アジアにおける
錢貨流通をめぐって——15・16世紀を中心に——」

12月24日（火）於長崎県福江市「ホテルシャトーイン福江」

深見純生「宋代の南海諸国における「中心」と「周辺」——『諸蕃志』に記さ
れた産物と博易の品からみる——」

山内晋次（日本学術振興会特別研究員）「航海と祈り——日本古代史からみた
海域交流の一端——」

真栄平房昭「東アジア海域史からみた五島・琉球——漂流・漂着資料の紹介をか
ねて——」

各発表の概要と成果は以下の通りである。

（大田報告）報告者はまず15・16世紀の中国における錢貨流通を問題にし、対外交易の
影響から銀の供給が過剰となり、それに反比例して錢貨が上昇した。そのことが錢保持の
有利化をもたらし、市場からの錢貨引き上げ現象を生んだ。錢貨が流動性不足となったた
め劣悪錢流通となったことを具体的数字をあげて解説した。

次に同時期の日本の場合も、中国の銀流通の諸画期に連動するように、15世紀末から撰
錢行為の発生と錢貨の急騰、錢の棲み分け現象が起こった後、渡来錢の途絶から一時期
「米遣い」＝石高制への回帰がおり、江戸時代に入って独自錢貨（寛永通宝）の発行と
なった。

（深見報告）『嶺外代答』（1178年）は、「広域物流センター」とでも言うべき「都会」
という概念を用いて海外諸国の構造の理解を提示している。『諸蕃志』（1225年）もこの
「都会」概念を継承しており、東南アジア部分について言えば、交趾・占城・真臘・三仏
齊・闍婆・渤泥・麻逸という7つの中心を認めている。本報告は、この7つを中心として
構成される東南アジア海域世界のネットワークが、具体的な交易品の構成や流通とどのよ
うな関係にあるか、また交易品にどのような特徴があるかを『諸蕃志』に則して検討しよ
うとするものである。

東南アジアの産物は自然産物が中心である。しかしその採集はいわばたんなる「採集経
済段階」にあったのではなく、占城国の沈香がその典型であるが、国家の管理下に專業集

団によってシステマティックに行われている場合のあることに注意する必要がある。なお沈香のうちボルネオ島のものは渤泥ではなく閩婆という「都会」から国際市場に供給された可能性が高い。国際商品への国家の積極的な関与ということでは、森林産物の採集を越えて、積極的な商品栽培が展開されていることも重要である。当時の海域アジア世界全体でジャワがコショウの最大の流通センターであったが、それはインドなど他所で生産されたコショウがジャワに集まってくることもさることながら、ジャワ自体がコショウの一大産地（おそらく当時世界最大の）であったことによる。またマラッカ海峡地域の博易品つまり輸入品に米が挙げられていることが注目される。『諸蕃志』の記述を検討するとその米は、自覚的な商品生産としての米作が行われたジャワからもたらされた可能性が高い。他方ジャワの博易品を見ると、他の東南アジア諸国と違って、コショウ栽培に不可欠の川芎のほか、硃砂・緑礬・白礬・鵬砂・砒霜といった製造業の存在を前提にする商品が目立つのも注目される。

（山内報告）本報告では、8－13世紀頃の東アジア海域を航海する海商・僧侶・外交使節などが、どのような航海安全の信仰をもっていたのかを考察した。航海者の信仰の問題は、これまでの歴史研究ではあまり顧みられなかったが、この問題に光を当てることにより、東アジア海域世界の結び付きの新たな側面が見えてくるものと思う。

1. 海神・龍王：本節では、日本・朝鮮・中国における航海守護神としての海神・龍王に対する信仰の事例をいくつかとりあげ、その信仰をめぐる三地域の共通性と差異性を考察した。そしてさらに、日本近世の船卸し祭文に見える、北宋の「宣和四」年の年号を有する咒文が、日本に來航した宋海商たちが渡海の安全を祈った祭文・願文と歴史的につながるものである可能性を指摘した。

2. 観音菩薩：『法華經』・觀世音菩薩普問品の文言を根拠として、観音は古くから広い地域において航海安全祈願の対象とされていたといわれている。本節では、8－13世紀頃の日本・朝鮮・中国・東南アジアにおいても、共通して観音が航海守護の菩薩として信仰されていた状況を指摘した。

3. その他の諸信仰：本節では、以上のような信仰の他に、日本の遣唐使の間に薬師如来や妙見菩薩の信仰が見られる点や、12世紀の朝鮮における海難に際して髪を切るという行為が、日本近世の船霊信仰とつながる可能性を指摘した。

（真栄平報告）「国家」レベルの枠組みによる従来の国際交流とは異なり、最近の研究における新たな視点として「地域」レベルのさまざまな相互交流の実態が注目されている。

すなわち、モノ（交易品）やヒト（人間）の交流といった複合的な現象を、「地域」レベルの歴史や自然環境の特性をふまえ、＜国境＞の枠組みを相対化する視点から解明することである。

例えば、10－12世紀頃交易品として九州から奄美・琉球諸島までも広く流通した「石鍋」がある。長崎県西彼半島産の滑石という軟らかい石をくり抜いて作った石鍋は、土鍋などに比べて保温性にすぐれ、その流通は西日本を中心に東は関東から南は波照間島にまで及んだ。また、カムイ焼（亀焼）と呼ばれる灰色の陶器が注目を集めている。11－12世紀頃奄美德之島で生産されたカムイ焼の壺・鉢・碗などが、トカラ諸島以南の琉球各地で出土している。

こうした特産品の遠隔地交易は何を意味するのであろうか。安里進氏の指摘によれば、集落跡から多く出土するカムイ焼の壺は米・麦などの穀物貯蔵用とみられ、それが大量に流通した背景には、従来の漁撈を基礎とした貝塚時代から農耕生活様式への変化があり、まさに琉球の島々に新時代の到来を告げる象徴的な出来事であったと推測される。また、外来の陶工や商人たちの活動は、貝塚時代には無かった窯業生産の開始と商品流通の展開をうながした。石鍋とカムイ焼の流通は、それまで南方系の先史文化が濃厚であった先島諸島にも強いインパクトを与えた。すなわち、「亀焼の流通圏が先島にも及んでいることは、異文化圏であった北琉球圏と南琉球圏が一つの経済圏に統合されたことを意味した」という。

こうした石鍋や陶器などの「土地から生まれる産物」とは別に、琉球ではサンゴ礁の海産物資源を利用した交易が古くからさかんであった。たとえば、夜光貝（螺鈿の素材）、ゴウウラ（装飾貝輪の素材）、貨幣にも利用されたタカラガイ（寶貝）など、琉球近海で採れる海産資源は、日本・中国・朝鮮など各地へ運ばれた。「貝の道」とよばれる海の交易ネットワークが存在していたのである。

桃木と八尾はまだ研究会において報告を行っていない（2月末現在）が、以下のような内容の研究を行い、その研究内容の一部はすでに後掲の論文に発表されている。

（桃木研究内容）前年度に続き、東南アジア史の中のチャンパ史の位置について学説・史料整理を行った。『歴代宝案』、『華夷変態』など、琉球・日本史料の利用に注目している。また、今年度は北部ベトナム国家の経済史を東・東南アジア史のなかで再検討する作業に着手した。

第一はかつて行った10-15世紀を中心とする交易史研究の再検討で、未完成だった15世紀の交易について、『歴代宝案』なども用いて検討を再開した。明代前期の朝貢貿易体制のもとで北部ベトナム国家の交易が、この主流に対抗する地位を占めえたかどうかについては、まだ十分に明らかになっていない。

再検討の第二は農業と国家との関係で、土地制度や村落共同体、農法などにくらべ検討の遅れている労働力編成、標準経営面積の変遷、国家および支配階級による租税・賦役の收取、分配の方法などを検討しつつある。

（八尾研究内容）今年度は前年度に考察した、ベトナム北部ヴィンフー省の少数民族ムオン族首長（官郎）の子孫に伝わる15世紀の嘱書と、同じ村の一ランク上の上級首長（土酋）の15世紀嘱書について比較・考察を行った。その結果、土酋は官郎を束ね、中央から派遣されたヴェトナム地方官僚と直接接する立場から、官郎より一層、中央政権の「掌握の論理」と地方社会の「独自性の論理」との板挟みに陥り、そのすりあわせに苦勞し、それがこの嘱書にも反映されていることが判明した。

まず、「兵税田」の存在が明示されている。別の文書（18世紀のこの村の戸簿の写し）によれば、この兵税田は徴税のメインの対象になっており、兵役の義務をおそらく課されていたこの村に、代償としての税という名目の下で徴税がなされたことを意味するのであろう。

次に、土地の面積表示は、官郎嘱書のように、「稻〇〇束分の田」などというローカルなものではなく、平地同様「〇〇畝〇〇高」と記されている。前述の戸簿も「〇〇畝〇〇高」とあることから、おそらく村の中から提出されてきた報告書を纏め、中央向けに「翻訳する」作業を土酋は行っていたと考えられる。

最後に、村民が日常生活の上で、首長に従うことを事細かに規定した「例」が官郎嘱書には含まれていたが、土酋嘱書にはその部分が少ない。これは土酋の「例」からくる利益がすくなかったことを意味するものではなく、嘱書には本来書かれる内容のものではないという中央の常識を配慮したものと考えられる。同じ少数民族の首長とはいえ、一つランクが違うだけで（一歩中央に心理的に近いというだけで）これほどの差ができ、それが両嘱書の差となって現れたのである。

4. 研究の成果とフロンティア

この項目に関しては3を参照していただきたい。

5. 今後の課題

結局、テーマに掲げた「中央－地方関係の類型化」には手の届かぬまま、2年が過ぎてしまったことは残念でならない。ただ、研究が進んでいる日本史の分野から班の内外の研究者を招いて報告をいただいたことは、決して無駄ではなかったと考えている。その上で研究分担者各人の課題をあげていきたい。

深見の場合は扱う時代が古く、新たな文書史料に恵まれる可能性の薄い状況にあって、ものの流通のみならず、生産の問題にまで踏み込んだ今回の報告をどう進展させるか、その研究方法が問われる。

真栄平の場合もそれは同じだが、逆に文書に拘わらなければ史料となりうるものは非常に多く、何がその時代のその地域の交流を解きあかすに相応しいかという史料の選択が問題となろう。

山内は、信仰の分野に踏み込んだのはこれが初めてであり、今回の報告はこの問題解明のための最初の一步にしか過ぎないとし、今後さらに、日本・朝鮮・中国・東南アジア地域における事例を広く収集し、宋代の海商と寺院の関係などの問題に注目しつつ、東アジア海域世界に通底する結び付きの糸をより明確につかみだしていきたいと、報告の席で発言している。

桃木はチャンパ史像の再検討作業をこの数年にわたって行い、今回、学界展望を行ったが、その末尾に述べているように、ディシプリンを超えた多くの領域の研究者（例えば、建築学、美学、宗教学、碑文学、文学など）のチャンパ研究への参加を切望している。

最後に八尾の場合は、史料のもつ限界（改竄などの可能性）をどうクリアするか、さらには、ベトナム史の枠組みを超えて、大陸部東南アジア史の中でこうした少数民族とベトナム中央政権との関係をどうとらえ直すかなど、問題は山ほどある。

6. 研究業績（平成8年度発表分）

八尾隆生

「黎朝聖宗期の嘉興丁氏——嘱書の分析から——」『東洋学報』78-2, 1996.

「嘉興府土酋何氏文書校合」吉川利治（編）『平成8年度科学研究費(国際学術研究)研究成果報告書』大阪外国語大学, 1997(印刷中).

深見純生

(訳)「オランダ領東インドにおける印欧人の運動」『桃山学院大学・総合研究所紀要』22-1, 1996.
「1913年のインドネシア—東インド党指導者国外追放の社会的背景—」『東南アジア研究』34
(1): 35-56, 1996.

桃木至朗

『歴史世界としての東南アジア』(世界史リブレット12)山川出版社, 1996.
「南から見た明清史——ベトナム経済史の場合——」森正夫他(編)『明清時代史の基本問題』汲古書院, 近刊.
「東南アジア前近代国家研究の現在——チャムパーの場合——」吉川利治(編)『平成8年度科学研究費(国際学術研究)研究成果報告書』大阪外国語大学, 1997(印刷中).

真栄平房昭

「琉球王国における海産物貿易——サンゴ礁の海域の資源と交易——」『歴史学研究』691, 1996.
「煙草をめぐる琉球社会史」高良倉吉他(編)『新しい琉球史像』榕樹社, 1996.
「砂糖をめぐる生産・流通・貿易史」斉藤善之(編)『新しい近世史』3, 新人物往来社, 1996.